



2015 北海道選抜 U-12 韓国遠征

2015年11月6日～9日

【報告者】 尾見 秀樹(監督)
松井 芳樹(コーチ)
西村 祐紀(コーチ)

公益財団法人
北海道サッカー協会



会場: 韓国・ソウル特別市孝昌運動公園

1 はじめに

小学校の年代で国外試合を経験することは大変貴重な経験であり、有意義なものにしよう、そしてサッカーだけではなく韓国の文化に触れ、選手ともたくさんコミュニケーションを取ろうと、新千歳空港での出口会長の言葉を皮切りに本遠征が行われた。今回の遠征のテーマは、

- ① 走る！競う！粘る！日本代表として戦おう！
- ② 冬季間の練習の課題を発見しよう！
- ③ Off the pitch の徹底(挨拶、食事、睡眠、後片付けなど)

の3点とし、そのほかにも選手それぞれが自分の遠征のテーマを考え、意欲的に取り組めるようにした。

また、3試合通したゲームテーマとして、「11人制に早く慣れよう！」

- ① 守備～1vs1とチャレンジ&カバー
- ② 攻撃～ボールを持っていない時の選手の動き
- ③ ポゼッション～サポートの三原則(距離・角度・タイミング)

とした。



北海道での一貫指導をブロックトレセンから！！

日本代表とオリンピック代表を2015年までに輩出する！！

和歌山国体(2015)までには優勝を！！

団 長 出口 明(北海道サッカー協会会長)
副団長 熊谷 輝男(北海道サッカー協会副会長)
総 務 安芸 瑞穂(北海道サッカー協会事務局長)
監 督 尾見 秀樹(HFA 技術委員会委員)
コ ー チ 松井 秀樹(HFA 技術委員会 U-12 部員)
西村 祐紀(HFA 技術委員会 U-12 部員)

選 手

石川 蒼生 砂田 匠(以上コンサドーレ札幌 U-12)
佐藤 優多 岡崎 悠(以上アンフィニ MAKI FC)
吉川 敬進 松木 玖生(以上室蘭大沢 FC U-12)
山科佑太郎 松田 隼風(以上 プレイフル函館)
川原 颯斗(LIV FOOTBALL CLUB U-12)
菊池 季汐(伏古サッカースポーツ少年団)
西岡 亮哉(FIBRA FC)
西 椋弥(上江別ジュニア FC)
渡辺 大翔(西野第二サッカースポーツ少年団)
高桑 輝人(エスピーダ旭川)
岡本 大地(旭川 GBB)
阿部 秀哉(旭川コスモス JFC)
山口蒼一郎(WWO ジュニア FC)
大津 郁斗(FORCA YOICHI JFC)

2 レギュレーション

試合時間は、全3試合とも25分ハーフ、11人制でボールは4号球。日本同様に自由な交代ではあるが交代用紙の提出が求められた。試合会場の「考昌運動公園」は、最近張り替えたばかりの美しい人工芝で大人用のピッチサイズとゴールだった。

対戦相手は、第1試合がソウル特別市選抜Aチーム、第2試合がソウル特別市選抜B、第3試合がAB混合のチームだった。9月の札幌での日韓交流大会に参加した選手もいたが、北海道代表はその際には直接対戦することはできなかったため、ほぼ初対戦となった。



後半になってもお互いに攻守が激しく入れ替わる状況で、体力的に厳しくなる選手もいたが、総力戦という言葉が当てはまるように、全選手が出場し、そのまま1-0で試合終了となった。

3 ゲーム内容

1試合目の直前に出口会長からの激励を受け、試合に臨んだ。天候は雨であったが、人工芝のピッチでは全く影響はなく、ピッチコンディションとしては素晴らしいものであった。北海道の選手としては不慣れな11人制のサッカーであるが、8人でも11人でもゴールを奪うこと、ゴールを守ることは変わらない、自信を持って行こうと選手に伝え、試合が開始された。韓国チームは、体の大きさに加えテクニックのある選手も多数いた。体格は北海道と格段の差があった。開始10分程度は、広いスペースと増えた人数になかなか対応できずに危ないシーンもあったが、粘り強い守備で無失点に抑える。途中から徐々に慣れてきた北海道は、広がっていた左サイドのスペースにMF菊池から効果的なスルーパス。駆け上がった左SB阿部がラインぎりぎりでも折り返し、コースを狙ったMF吉川の左足シュートが決まり先制点をあげ、1-0で前半を折り返した。ハーフタイムには、「スペースを使おう、シュートを積極的に打とう、球際を激しく行こう」などと選手に伝え後半に臨む。



2試合目は1試合目の1-4-4-2のシステムから、中盤での組み立てをしっかりとしたいこと、繋ぎながらも前線をしっかりと狙うことを意識するために1-4-2-3-1のダブルボランチのシステムとした。韓国チームは1試合目より、より大きく速い選手が多くいるチームで、北海道にとっては2試合目の疲労もあり難しい試合となった。前半序盤にカウンターから韓国チームにスルーパスを出され先制をされる。北海道も疲労はしているものの、ゲームテーマである「チャレンジ&カバー」を意識し、突破を防いだ。ボールを奪ったあと、果敢にゴールに迫るがなかなかゴールを割ることができない。前半は0-1で終了。ハーフタイムには、「やれていないわけではない、1点取ったら変わる、続けてがんばろう」と選手を鼓舞し、後半開始。後半は守備が非常によく、ハードに戦うことで北海道のペースになっていく中、後半13分、ゴールから約30mの位置でフリーキックを獲得、選手同士でコミュニケーションをとり、MF吉川のキックは壁を優しく超えるループパス、それにタイミングよく反応していたDF松木がDFラインとGKの間でボールを受け、そのままシュートを決める。これで1-1。リズムが出てきた北海道はゴール前までボールを運ぶがなかなか決めきれず、後半残り4分、前がかりになっていたところを裏のスペースをつかれ、GKもかわされてシュートを決められる。最後まで諦めずに戦うがそのままタイムアップ、1-2での敗戦となった。

3試合目は1・2試合目の選抜選手で構成されたチームであった。最終試合ということで、出口会長、熊谷副会長の激励を受け、選手・スタッフ・役員みんなで円陣を組み気持ちを一つにして試合に臨んだ。夜のミーティングで戦い方、今遠征の目的などを再確認した成果か、北海道のペースで試合が進む。ボールをゴール前まで運ぶ回数がとても多く、優位に試合を展開しているがなかなか点数が決められず。前半を0-0で折り返す。後半になっても北海道のペースは崩れない。後半4分・16分に決定的なチャンスが訪れたがそれも決めきれず、結果0-0のスコアレスドローで試合終了。

試合終了後、北海道選手のハードワークに韓国サポーターから大きな拍手を頂き、北海道選手も「カムサハムニダ」と大きな声で返答し、交流の素敵一面が見られた。



3試合で1勝1敗1分という結果で試合を終えた。韓国の役員の方々からも、11人制をいつも行っているのではないかと、というような試合で素晴らしかったと賞賛の言葉をいただいた。



4

成果と課題

【攻撃面】

- ボールを失わずに保持することができた。(3試合とも支配率は北海道が上回った)
- くさびの選手がよく受けようとしていて、ボールを入れることができた。
- ゲームを重ねるごとに選手間の距離感【サポートの三原則】がよくなり、関わりながらゴールに迫ることができた。
- ▲ 相手を意識してプレーする意識が薄い(本当に相手やスペースを観てプレーをしているのか)。
- ▲ フィニッシュの意識・フィニッシュの精度・ゴール前の崩しの精度(ゴールが広いはずなのにシュートを打たない。ゴールが決まらない)。

【守備面】

- 粘り強い守備、球際の激しい守備を行うことができた(FFPからの課題が少しずつ改善されてきた)。
- チャレンジ&カバーの質の向上(みんなで協力して守備を行うことができた場面が多かった)。
- 1stDFのプレッシャーが激しく、コースを限定してボールを奪うことができた。
- 1対1の対応で負けていなかった。
- ▲ GKとDFラインの連携
- ▲ GKのポジショニング

5 まとめ

体格面ではかなりの差があったが、粘り強く寄せていったり、ハードワークをしたり、フィジカル面でのハンデを感じさせなかった。また、パス&コントロール&ターンも非常に質が高く、個の部分でも十分に戦っていた。

ゲームテーマであった

「守備～1vs1とチャレンジ&カバー」「攻撃～ボールを持っていない時の選手の動き」「ポゼッション～サポートの三原則(距離・角度・タイミング)」の部分は、達成できたと感じる。

また、遠征のテーマであった「走る！競う！粘る！日本代表として戦おう！」「冬季間の練習の課題を発見しよう！」「Off the pitch の徹底(挨拶、食事、睡眠、後片付けなど)」についても、選手のレポートなどから十分に意識されたことが伺え、Off the pitch では、積極的に韓国の方々とのコミュニケーションを取るなど、我々の予想以上のことを実践し、達成できたと感じる。

一方、今後に向けて我々指導者の課題としておさえておきたいこともあった。FFP から韓国遠征を通して、『ゴール前の崩し』や『フィニッシュの意識』が北海道の課題である。

ゴールが大きいにもかかわらず、シュートを打たない、打とうとしない。ミドルシュートのトレーニングをしたら上手な選手もいるのだが、打たない。逆にゴール前の近いシュートを外す場面が、FFP や韓国遠征でも見られた。

また、真の『観る』・『判断』というところが不足していると感じた。8人制と11人制。8人制ピッチとフルピッチ。少年用

ゴールと大人用ゴール。状況が変わっているが、いつもと同じサッカーをしていたように感じる。パターン化しているとまではいかないが、教え込まれている感じがあり、選手が観て状況に応じて判断する『判断力』という場面では、課題であったと感じた。

6 全体を通して

今回の遠征を通して、交流試合だけではなく、ワールドカップスタジアム見学や毎日の食事など様々な経験をし、学ぶものがとても多かったと感じます。1年間の成長の成果を試すには最高の素晴らしい舞台であり、選手はとてもよい経験ができました。出口会長の話にもあったように、この経験を北海道、さらには各地区に戻ってからも生かし、今後この中から日本代表として再び韓国に来て、国際試合を行うことができる選手が出ることを願います。

また、今回は指導者を3名にさせていただいたことにより、統括、ゲーム分析、生活面などというように役割分担ができ、よりよい遠征となった。それぞれ分担して活動することで、選手にとってもよいサポートや指示を行うことができ、非常によかったと感じております。感謝申し上げます。

最後に、このような素晴らしく貴重な経験をさせていただいた、出口会長はじめ熊谷副会長、安芸事務局長、道協会スタッフの皆様、ソウル協会の皆様に改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

